
ot;お試し版" Fate/No Existence —**第零次聖杯戦争封譚**—

葵（仮）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

” お試し版 ” F a t e / N o E x i s t e n c e — 第零次
聖杯戦争封譚 —

【Nコード】

N 3 6 6 2 Y

【作者名】

葵（仮）

【あらすじ】

孤独な少女は運命の男に出会い、孤高の男は運命の少女に出会う。
運命は神が決めるのではない、運命を決めたのは本人たちなのだか
ら――

この作品は” お試し版 ” です。本編の前のプロローグのその
前の事前談です。登場人物は厳密には二人だけ、あかいあくまと第
三位（確か）です。

言うなれば、S t a y n i g h tとEXTRAの関係、つまり二次という枠の中のオリジナルとでもいいましょうか。本編の内容には入っていきません。 作品の最後にアンケートがあります。読んでくださった方はアンケートに答えていただければ幸いです

（前書き）

どうも、こんにちは。

前書きでは多くのことは語りません。

どうか、最後まで読んでいただければ幸いです。

荒筋にも書いてありますが、作品の最後、後書きにアンケートがあります。

読んで下さった方はお答えいただけると嬉しい限りで御座います。

では、目くるめくなったらワールドとやらをお楽しみいただければ幸いです。

The s t a r t o f ” L o s t s t o r y ”
『プロローグ』

「もう……いやああああ!!」

女性の——しかし、女性らしくもない声がある一つの家に響く。
その声の発声源は、まっかな少女——語弊があるかもしれないが、
赤いのは服であり、髪は黒。しかしながら、その黒が少女の着た衣
服を更に際立たせていた。

薄暮暁闇　逢魔が時、遠坂凜は^{おびただ}夥しい量の書類と一人、格闘する。
それというのも、第五次聖杯戦争が終結し、それに伴って起こつ
た事象への事後処理ということ他ならなかった。

冬木という一大霊地の^{セカンドオーナー}管理人である遠坂家は、御三家の一つとし
て処理を担当しなくてはならない。

書類仕事というのは面倒極まりないものではあるが、遠坂家の当
主として、また、聖杯戦争の当事者としての責任が彼女を動かすの
であつた。

ただ、理由というのはそれに限るわけではなく——

「うう………士郎………何でなのよ………」

自身の恋人であり、弟子でもある衛宮士郎という朴念仁の童顔を
思い浮かべ、凜は嘆息した。

先ほど説明したように、遠坂家は冬木市の管理人。管理人として、その管理地を離れる事は例え数日間だけだったとしても憚られる。その戒めが、現在の彼女を打ちひしがらせていた。

「なんでイリヤたちと……買い物なんか……」

前述したように、士郎は凜の恋人である。しかし、士郎は筋金入りの鈍感男。自分の気持ちさえ、士郎に理解させるのにも随分と時間が掛かってしまった程だ（凜自身、中々行動に移せなかったという原因もあるが）。そんな彼が、よもや恋人を放って他の女と買い物などと——笑止千万。

「あー、もう！ 思い出したら腹が立ってきたわ！」

ミシミシと、手に持っていた辞書がありえない音を立てているのにも気がつかず、凜はツインテールに結んだ髪を——如何なる原理か、物理法則に逆らうように逆立たせる。地球の万有引力とニュートンを馬鹿にしたような事象を引き起こす凜。

が、途端に地球の重力を受けたかと思うと、凜の顔はみるみる内に脱力感に包まれる。

「……ふう。こんなことしても仕方ないし、休憩しようかしら」

凜は手に持った歪な形の辞書を机に置き、また一つ溜息を落とす。

「溜息をするたびに幸せが逃げていくっていうけど……これじゃ、逃げる幸せまで無くなっちゃいそうね」

んー、と伸びをし、机に手をついて立ち上がろうとする——が、

「ほへ？」

自分の体重を掛けた右手に唐突な浮遊感を感じ、凜は素っ頓狂な声をあげる。

次の瞬間――

ガラガラガラガラガッシャーン！！

余談ではあるが、遠坂凜には一つだけ『EX』のステータスがある。

その名も『うっかり』。端的に言えば、遠坂凜は天性の『ドジっ娘』なのである。

聞く人が聞けば興奮するであろうが、彼女を少なからず知る人物にとっては、英霊同士の決闘が目の前で起こることよりも危険である。

幸い、遠坂邸には今現在、彼女一人。運良く、この『うっかり』に巻き込まれた人物はいなかったのは幸か不幸か。

「いっつ〜！」

机の上に山の様に積んであった書類は舞い、他にも机の上にあったものは目茶目茶に散乱してしまっていた。

凜は思い切りぶつけたお尻を摩りながら、とりあえずは立とう、と机に手を掛けようとする――が、やはり。

ズル、ごちん！

先ほどの衝撃で机の上にあったティーカップが倒れ、中に入っていた紅茶がぶちまけられてしまった所に、『うっかり』手を掛けてしまったのだった。

しかも、今度ぶつけた部位は、額。まさに、泣きっ面に蜂、踏んだり蹴ったりである。

「今日はいつも以上につつかりしてるわね、っと——」

今更ながら自分の驚きのうつかり加減に呆れながらも、今度は注意深く、何にも？まらずに自分の足だけで立ち上がる。

「わ、わたしだってやればできるじゃないの。ふふん」

無事に立てた自分を褒めながら得意げな顔をする凜。

周りから見ればそれが普通ではあるのだが、遠坂凜はその普通が一部分だけ欠如しているのであった。

——主に自身の保有スキルによって。

「ん……くう。ふう」

もう一度大きく伸びをして落ち着きを取り戻した瞬間——

ドカン、と盛大な音が二階から響く。

それは運命の悪戯か。はたまた、『世界の意思』なのか。

二階のどの部屋なのかは、なんとなく、わかってしまった。

その部屋——第五次聖杯戦争において、自身が召喚したアーチャーが不時着……邂逅した場所でもある——部屋。

無論、凜はアーチャーがきたなどという事はあると分かっていないし、召喚されるという事自体ありえない。

しかし、どうしても足は動く。そうと分かっている、自制は効かない。

アーチャー。英霊エミヤ。世界の守護者にして、正義の味方。そして——自分の恋人の、成ったかもしれない未来の姿。

聖杯戦争において自分自身と共に戦い、恋人と対し、逝った——座へと、還った英雄。

彼は、今も戦い続けているのだろうか。彼は今も世界を、正義を、秩序を守っているのだろうか。

逢える事なら、もう一度逢いたい。話せるなら、もう一度話したい。

考えながらも歩みは止めず、トントンとこ気味のよい音を立てて階段を上っていく。

だが、やはり分かつているのだ。

その扉を開いた先、いるであろうモノは絶対に、彼ではないのだ。それが人であろうと、物であろうと。

ゆっくり、ゆっくりと廊下を歩き、その扉の前にたつ。

——意を決して、戸を開ける。

部屋の中にいたのは、彼の錬鉄の英雄とは程遠い——だが、自分ひいては、遠坂家の者にとっては反故に出来ない——人物が、いた。

「大……大師父！」

その者の名は、キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。現存する魔法使いの一人であり、第二魔法『並行世界の運営』の使い手。

そして凜の、ひいては、遠坂家の師父である。

ゼルレッチの出現に戸惑いながらも、一步下がり、礼をする凜。そんな凜の様子を見たゼルレッチは特に感慨を露にするようでもなく、凜をチラと見やる。

「こ、この度は一体どういったご用件で」

「なに、ちよいとした野暮用じゃて。それにしてもワシが転移を失敗するとは……年かのう」

「……え」

冗談じゃない、という目で、ゼルレッチを凝視する凜。
確かに、ゼルレッチは悠久ともいえる時を過ごしている。がし
かし、彼は稀代の魔法使いであり、使徒だ。

歳だなんだなどは——笑い話にもならない。

「それはさておき、おい、遠坂の娘よ」

「……は、はひっ！」

「近頃の娘は、老人が訪ねてきたのを客間にも案内せず茶の一杯も
出せんのか」

「い、今すぐにつ！」

「ほっほっほ。はようせい」

凜は急ぎ足で階段を駆け下り、台所へとむかった。

二人は遠坂邸の応接室で、向かい合うようにしてソファに腰掛け
る。

最初に口を切ったのは、凜。

「それで……本日はどのようなご用件なのでしょうか？ いつも行
き成りなのは重々理解していますので、何でも仰ってください」
「痛いところをつくのう……。まあ、よいわ。用件はこれじゃ」

ゼルレッチが凜に差し出したのは、一冊の本。太さは広辞苑ほど。

「……これは随分と……」

「ふむ、娘よ、これが何かわかるかの？」

「いえ、私には検討も……」

「うーむ。わからぬか」

「はい。強いて言えば——気になるのはその魔術封印ですね」

「これはまあ……用心じゃ。ワシとて大事になるのは避けたいしのうち」

「はあ……」

あの、『魔法使い』キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグが大事になるというほどの書。

見るものが見ればすぐにわかる。十や二十では到底足りない夥しいほどの魔術封印。しかも、その封印の一つ一つ手抜きなく、正に封印書と読んで憚られないものである。

凜は、もしもこれほどの封印が施されるほどの重要物が漏洩したなら——と思考を巡らせ、すぐに目の前の書へと目を向ける。

中身は一体何なのであろうか。それが分からなければ漏洩の危険性など推し量る事も出来ない。

一級の魔術が記された魔道書？ はたまたそれを越えて魔法について記された書？

いや、あの宝石爺がそのような面倒な事をするはずもない。何しろ、真祖の吸血鬼を『気に入らないから』などといって討滅しようとするような人だ。いや、或いはそれほどの変人ならば気まぐれでやるのかもしれない。だが、どうしてかその可能性はないと思う自分もいる。

ならば、『教会』にとって不都合に当たるようなことが書かれたもの？

——全く持つて、検討もなにもつかない。

そのとき、凜は一つだけ、考えに行き当たるものを思いつく——が、それは流石にないだろうとその考えを思考の海に捨て、もう一度思考を巡らせる。

ゼルレッチは、自分を訪ねてきた。ならば自分や遠坂家、冬木に関係のあること。

冬木、そう冬木市である。日本屈指の霊地にして——思い出すの

も辛い——そう、魔術師業界有数の一大イベントが行われる地。

すなわち

——聖杯戦争。

聖杯戦争は終わった筈だ。

あらゆる願いを叶える願望機、聖杯は破壊された。大聖杯も。

そして——『この世全ての悪』^{アンリ・マユ}も。

大聖杯の記憶と共に、妹桜の姿が脳裏に移り、知らずの内、手に力がこもる。

もうこの地で、冬木であのような凄惨な事があるわけがない。否、あつては成らない。それは、冬木という地の管理人である者としても責務でもあるし、実際に、その狂ったゲームに参加していた者としての体験からでもある。

魔術とは遠き世界に生き、人生を往々にして満喫していた、いや満喫をしていくはずであった幾人もの無関係な人々が死に。

流される必要のなかった血が、涙が流れ、同じく生まれるはずのなかった怒りが、憎悪が、悲しみが生まれた、クズのような戦争を思い出し、自分を叱責し、彼の姿を思い浮かべ、また腕に込める力が強さを増す。

彼は——正義の味方は言った。

何て——？ 何だったか。ああ、一つ覚えている。

『なんでさ——、と。』

自分でも、この言葉が耳に残っていることに驚いている。

もっと衝撃的な言葉を言われた事もあると思うが、よくは思い出せない。

それはともかく、恐らくこれは聖杯戦争に関係のある書なのであるう、と凜は辺りをつけ、もう一度件の書を凝視する。

魔術封印によって、表紙は何も書かれていないように見える。

よくよく見れば、魔術封印だけでなく物理的にテープで開かない

ようにもされていた。
そのとき、だった。

「聖杯戦争……」

「——っ！」

口を開いたのは、ゼルレッチ。

それも、その口から出た言葉は無情にも、予想通り。少なからず期待してはいたが、逆に聞きたくもないと思っていた言葉。

凜は、咄嗟に体を固まらせる。

「なに、少し話をするだけじゃ」

「……………」

凜は、何も答えない。

それを肯定の意と受け取ったのか、それとも凜がどういう反応を示そうと話を辞める気はないのか、ゼルレッチは言葉を続けた。

「ある日、何のことなく気まぐれで並行世界に足を運んだのじゃ。

無作為転移での。ワシが行き着いたのは、そう、冬木——じゃった」

「冬木……ですか」

「うむ。しかし、この冬木とは違う、並行世界上の冬木。冬木であつて冬木でない冬木。しかしその町は、この冬木と全く同じ町並み、全く同じ雰囲気を持っておった。何もかもが同じ。ただし、違うところもいくつかあった。——分かるかの？」

「……住んでいる人々、でしょうか？」

「ほっほ。察しがよいのう。例えば同じ町並み、雰囲気を持った場所といえども、全てが同じとは限らん。この場合は住人ではあったが、場合によっては同じ地名でありながらも、全く違う町並みの場合もある。それこそ並行世界足り得る理由でもあるうて。——と、話し

がずれたの。ワシが行き着いた冬木はその時、丁度聖杯戦争開戦直前じゃった」

「——っ」

言葉を、声を失わずにはいられない。

例え、自分があるこの世界とは違う並行世界のことだとしても——到底、そう到底許容できるものではない。

やはり、そうやはり（・・・）だ。それは冬木の宿命か。御三家という、一種の魔術師の呪いが築いた柵しがらみなのか。

凜は、自分の手が、赤い液体で湿っている事に気がつかない。

「……呪い。正しくその通りじゃ」

「……へっ？」

思考が読まれてしまったことに驚き、素っ頓狂な声を上げてしまふ。

「顔に書いてあるしのう。魔術師の自分勝手が、この地に深く刻まれた悪しき戒めが、この世界に根を張り、『根源』に根を張り、また違う世界で芽をだしてしまった。それほどまでに、聖杯戦争というモノは世界を苦しめたんじゃない。——まあ、そのシステムやらに関わったワシ自身が言うのも、妙な話じゃがのう」

「そう……ですか」

「そしてワシはその戦争を見守る事を決めた。何しろ、さつきも言ったとおり、ワシに責がないわけではない。寧ろ当然の行動じゃろう。……ワシを知る者からしたら、正気を疑うかもしれんのう」

凜もゼルレッチの世間体は知っている。

彼は魔法使いなどといった名誉の称号の他にも、放蕩爺という綽名も持っている。

並行世界の移動という自身の力を使い、自由気儘に旅をし、多くの場合何かしらの騒動を起こして帰ってくる。

それがキシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグの世間体であり、その不名誉な綽名の意味。

しかも、当の本人がそれを気にするどころか、肯定して開き直っているので、尚更罰が悪い。

「その結果が、これじゃ」

そういつてゼルレッチが指したのは、目の前に置かれている書。封印された書。

「この書には、その聖杯戦争の状況が小説の様に書かれておる。参加した者の心情も、じゃ」

「し、心情ですか？ ですがどうやって？」

「そ、それなんじゃがな……。この書には名前があつての。それが

「――」

何か言いにくそうに口ごもるゼルレッチ。

しかし、一瞬目を瞑った後、意を決したように口を開く。

ゼルレッチがその後に続けた言葉、この書の名前は凜を驚愕させるには十分のものであった。

何故ならその書の名前は――

「『アヴェスター遍く示し記す万象』、といったの」

「……え？」

「ア……『アヴェスター遍く示し記す万象』という書じゃ」

一瞬の沈黙、刹那の静寂が場を包む。
が、その平穏も一瞬のこと。

凜は対峙している相手が大師父だということも忘れ、半狂乱で叫ぶ。

「はあああああああ！？　ア、遍アヴェスターく示し記す万象って、あのゾロアスター教の教経典の？！」

「そう大きな声を出すでない」

心底五月蠅そうに耳を手で塞ぐゼルレツチ。しかし、叫んだ張本人はそれどころではない。

「だ、だだだだって！　え！？　本物！？　何でこんなところに！？」

「ちよいと、拝借してきただけじゃ」

「で、でも現在は4分の1しか残ってないって話ですし……」

「うるさいのう。こっちにはこっちで色々とツテがあるんじゃ。ま
ずは、落ち着くんじゃ」

「は、はい……。申し訳ありません」

「よしよし。それでこの、『遍アヴェスターく示し記す万象』というものはじやな、人の声にならない気持ちや、起こった出来事を記録する道具じや。それを使い、その聖杯戦争を記録したのじゃ」

なるほど、と凜は相槌を打った。

この封印は、中身自体ではなく記された書自体が危ないからなのか。

納得だ——なんてことがあるわけない。

「——って、じゃなくてですね。ツテって何ですか！　失われたものを取り戻すなんて並大抵のことじゃありませんよ！」

完全に紛失したものを、それも宝具と呼べるものを復元するなど

並大抵の事ではない。それは、魔術師である凜自身よく分かっていた。

いや、或いはこの人物なら……という憶測も脳裏をよぎったが、この人なら出来るかもしれないとも思ってしまった。流石にそれはないといって欲しい。

「そう、それなんじゃ。現在残っているとされているのは原文の4分の1、というのは少なからず知る者にとっては常識。残りの4分の3の行方など、誰も知らないんじゃ。だからこそ、紛失なのじゃ。紙が風化したりなどして文自体が消失してしまったわけではない。そもそも、残り4分の3だけが消えうせ、4分の1だけ残っているというのもおかしい話ではないかの？ 真実はの、簡単なことじゃ。――発見されたのが4分の1だけ、ということじゃ」

「なるほど……。しかし、その残りの4分の3を大師父がもっている理由にはならないと思いますが……」

「確かにその通りじゃな。しかし、じゃ。まさしくそれは僥倖。――道すがら偶々、拾ったのじゃ」

「なるほどなるほ――って、そんな事あるわけないじゃないですか！」

「む、スルーしてくれんのか。なら、元からワシが持っていたということに――」

「”なら”ってなんですか！」

「ええい、静かにせんか！ 進む話も進まんじやろうが！」

逆切れではあるが、ゼルレツチの言う事も一理あると考え、凜は渋々ながらも引き下がる。

その様子を見届けたゼルレツチは、徐に、おもむろ一度、指を弾く。

パチン、静寂の中に乾いた音が木霊する。

凜は雰囲気^{きふき}に吞まれ、口を開けない。

魔術封印が、音も立てず魔力の粒子となって虚空に浮かび、消えた。

——《此处に、この場所で、封印は解かれる》

——《神秘は、人の目に、晒される》

封印が解けると同時に、独りでに書が開く。

と思えば、突如中空に浮かび上がり、書はザー、と電波を受信していないテレビのような雑音を出す。

そんな様子を気にせず、凜の目の前に座るゼルレッチは、まるで劇を見る前の少年の様に、期待と羨望を持った顔をして、その表情のままで、喜々とした声で、言葉を発した。

「さあ……伝奇劇の始まりじゃて」

その言葉を合図とするように、先ほどまでの耳障りな音はぴたりと止み、書からは、詩の朗読者のような、優しい男性の声が——朗読を始めた。

『これは、ある戦争と、ある一人の少女の物語』

——在る筈のない物語は、今、在る物語に変わる——

——そして、聖杯を巡るもう一つの伝奇が、始まる——

F a t e / N o E x i s t e n c e | 第零次聖杯戦争封譚 |

開幕

（後書き）

如何でしたでしょうか？

読んだ方によつて、多種多様な感想がおりだと思ひます。

さて、今更ですがこの作品はお試し版です。

この後から始まる本編にはたぶんできません。ゼル爺はわかりませんが。

やはり、書いてみてわかるのがFateの世界観、キャラクターを自分の納得のいくように動かすというのはとても難しく感じます。突然ですが、皆さんは【運命を貫く漆黒の螺旋】というにじファン掲載中の作品をご存知でしょうか？ 検索画面で高評価順を見たところがある日とはだいたいお知りだと思ひます。

総合評価2万越え、総合ランキングケタ台。にじファン書きとして、ある種の到達点だと思ひます。

Fate/Zeroの時代を題材として、そこに第五次のエミヤを放り込む、そういった作品です。この作品には正直、感慨を通り越して度肝を抜かれました。

どうしてあそこまでキャラを動かせるのか、どうしてそこでその台詞をだせるのか、一週回つて怖いほどです。と、そんな感じでした。

実のところ、その作品が無ければたぶんこの話は書いていません。構想だけになつて、キーを打つことは無かつたでしょう。

なんだかもうめんどくさいのでこゝら辺で切り上げますが、【運命を貫く漆黒の螺旋】、お勧めです。

ではでは、ラスト前にアンケートを。

1. どうでしたか？

A 面白かった

B うーん……

C ^^

D その他（何でも）

2・続きとか、どう？

A 読みたい

B どっちでもいいかな

C 読まなくていいや

3・この作品、五段階で（ほし）評価するならいくつ？

4・感想をなんでもどうぞ。指摘でも全然ダイジョブです！

てな感じで御座います。

3については、実際にポイントで評価してくれてもイイノヨ？

——では、またいつかお会いできる日まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3662y/>

"お試し版" Fate/No Existence —第零次聖杯戦争封譚—

2011年11月9日08時16分発行